

響曲の1つ、「第39番」で次シーズンへの期待を聴衆の耳に刻んだ。(中 東生)

CONCERT

3月

コンサート、イベントから

EVENT

Concert シュルツ率いるミュンヘン室内管弦楽団がシーズン終了

ミュンヘン室内管弦楽団(MKO)首席指揮者のクレメンス・シュルツ今シーズン最後の指揮となる定期演奏会を、3月8日に聴いた。モーツァルトの交響曲に挟まれた現代音楽2曲というプログラムは演奏者にとっても、聴衆にとっても重かったが、満員の聴衆は疲れも見せず、満足度もクレッシェンドしていった。

シュルツの今季を締めくくる定期にふさわしい選曲と言える、モーツァルトのザルツブルク時代最後の「交響曲第34番」は、休符に重点を置いた躍動的なアプローチで生き生きとスタートしたが、コンサートマスター周辺の美しい音色に対して、第2ヴァイオリンが弱く、対向配置の効果が出ない。最終楽章はテンポが走り、空回りのまま終わった。

「シュルツ率いるMKOにも翳りが……」と案じたのも束の間、トーマス・アデス「ヴァイオリン協奏曲《Concentric Paths》」は、今宵のクライマックスだった。作曲家として「ブリテンの後継者」と称される他に、ピアニストとしても著名なトーマス・エーデと共演もしているソリストのアウグスティン・ハーデリッヒは、自分の中から湧き出てくるかのように宇宙的な音楽を絞り出す。彼の音色がクラシカルなため絶妙なバランスを保っている。その主旋律に影のごとく寄り添う管楽器も絶妙で、相当の練習を要したのではないか。アンコールのパガニーニ「カプリース」では、ハーデリッヒ独特の琥珀色の響きが、黄金時代への郷愁を誘った。

休憩後はペア・ノアゴー《黄金の幕への航海》もこなし、モーツァルト最期の交

